

児童の攻撃性と適応および健康

坂井明子・山崎勝之

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第50号抜刷）

児童の攻撃性と適応および健康

Children's Aggressiveness and their Adjustment

坂井明子・山崎勝之*

攻撃性と社会・心理的適応

1. 攻撃性と仲間関係

これまでの研究で、攻撃性の高い児童は仲間から受け入れられにくいことがわかっている (Cairns, Cairns, Neckerman, Gest, & Griepy, 1988; Dodge, 1983; Dodge, Coie, Pettit, & Price, 1990; 前田, 1999; Rubin, Bukowski, & Parker, 1998; 佐藤・佐藤・高山, 1988; Willis & Foster, 1990)。このような研究成果の多くは、児童の仲間関係に注目して、仲間から拒否される子や無視される子がどのような行動特性をもっているかを調べる中で明らかになってきた。その場合、ソシオメトリックと呼ばれる手法が使われることが多い。児童にクラスの中の誰と遊びたい(遊びたくない)か、誰が好き(嫌い)か、仲の良い(悪い)友達是谁か、などについて数名ずつのクラスメートの名前を挙げてもらうというやり方である (Asher & Hymel, 1981; Hymel & Rubin, 1985)。また、遊びや勉強などの活動をどの程度、一緒にしたいか、クラス全員について Likert 法により5段階程度に評定してもらうというやり方も採用されている (Putallaz, 1987; Singleton & Asher, 1977)。しかしこのような方法では、攻撃性の高さが原因となってクラスメートから受け入れられていないのか、それとも受け入れられていないことが原因で攻撃行動を多く示しているのかわからない。そこで、4年生の男子について、自分の属するクラスで人気のある児童、拒否

されている児童、無視されている児童、平均的な児童4人で、毎週1回、6週間、一緒に遊ぶグループを作り(互いに顔見知りのグループおよび初対面のグループ)、それぞれがどのような行動を示すかを調べる研究 (Coie & Kupersmidt, 1983) や、互いに初対面の2年生男子で8名のグループを作り、ほぼ毎日、8回一緒に遊ぶ中で、それぞれがどのような行動を示し、仲間からどのような評価を受けていくかを調べる研究 (Dodge, 1983) が実施された。これらの研究では、顔見知りであるとないと関わらず、自分のクラスで受け入れられていない児童は、新しい環境でも、敵対的なコメントや身体的攻撃を多く示したというのである。

これらの結果は、攻撃的で仲間から拒否されやすい児童が学童期以前に仲間から受け入れられなかった結果として攻撃行動を学習した可能性を否定するものではないが、少なくとも学童期において、攻撃性の高さが仲間から受け入れられないことの原因となっていることを示唆している。ただし、これらの研究は男子のみを対象にしており、女子の場合にも同様の知見が得られるのかどうかは明らかではない。

また、これらの研究では、様々な攻撃行動を示す児童を攻撃性の高い児童と、一まとめにしているが、近年、発達研究において攻撃性は反応的攻撃と道具的攻撃に細分化されるようになってきた (例えば Crick & Dodge, 1996; Dodge & Coie, 1987)。この細分化をさらに進め、本研究では坂井・山崎 (2004) に従い、攻撃性を反応的攻撃および道具的攻撃に大別した上で、反

* 鳴門教育大学

応的攻撃を表出性攻撃と不表出性攻撃に分け、道具的攻撃を関係性攻撃で代表させるという立場をとる。この立場から見ると、仲間関係の研究は反応的攻撃に関しては反応的表出性攻撃に限定され、反応的不表出性攻撃と仲間関係との関連を調べた研究はない。また、関係性攻撃をあつかった研究は仲間関係との関連では道具的攻撃とは位置づけられていない。そこで、以下では、仲間関係と反応的攻撃（表出性攻撃）、および仲間関係と道具的攻撃の関連についての従来の研究を紹介し、関係性攻撃に関する研究は最後に紹介する。さらに、不表出性攻撃の仲間関係についても若干の示唆をしたい。

仲間から拒否される児童の中にはそれと同時に人気もある児童も存在する（controversial, 両端児・敵味方の多い子などと訳される：Coie, Dodge, & Copotelli, 1982; 前田, 1999）。道具的攻撃児は反応的攻撃児ほどは仲間から拒否されておらず（Dodge et al., 1990; Dodge, Lochman, Harnish, Bates, & Pettit, 1997）、道具的攻撃児が反応的攻撃児とは異なり、その攻撃を向ける相手を注意深く選択している可能性もある。両端児のなかには相手によって攻撃の向け方を変える道具的攻撃児が多く含まれ、彼らは攻撃の被害を受けているクラスメートからは拒否され、受けていないクラスメートからは受け入れられている可能性も考えられる。また Bierman, Smoot, & Aumiller (1993) は、小1から小6までの男子を対象として、拒否される攻撃児と拒否されない攻撃児の比較をしている。それによると拒否される攻撃児は身体的攻撃、言い争い、破壊的行動に加え、多動性を多く示し、注意散漫であった。これらの特徴のうち、多動性、注意散漫については、攻撃的非拒否児が攻撃的拒否児より低かった。この研究では攻撃児を反応的攻撃児と道具的攻撃児に細分化はしていないものの、上で挙げられた行動特徴は、まさに反応的（表出性）攻撃児の行動特徴そのものである。

このように、攻撃児、特に反応的表出性攻撃児は児童期において、良い仲間関係をもっているとは言いがたい。児童の発達にとって仲間関係は重要であり、適切な仲間とのつきあいをもてないことは重大な発達上

の問題を引き起こす（Asher & Parker, 1989）。そのため、反応的攻撃児は攻撃性が高いことそのものによるだけではなく、仲間関係が悪いことによる問題までも児童期を通して抱え込んでしまうことが考えられる。それに対して、道具的攻撃児は反応的攻撃児とは違い、ある程度の仲間関係をもっている。道具的攻撃児は仲間がいるために、反応的攻撃児に比べて発達上の問題を抱えにくいとも考えられるのであるが、実際は、そうでもないようである。なぜなら、道具的攻撃児の場合、社会的にお手本となるような児童ではなく、同じように攻撃性、特に道具的攻撃の高いもの同士で仲間関係をもってしまうのである（Poulin & Boivin, 2000）。そして、互いの攻撃的な行動をお手本とし、ますます道具的攻撃性を高め、青年期以降の非行や犯罪につながってしまう可能性すらある（Vitaro, Gendreau, Tremblay, & Oigny, 1998）。ただし、ここでもこれらの研究は男子のみを対象としているため、この知見が女子にも適用できるかどうかは明らかではない。

また、道具的攻撃の一つであると考えられる関係性攻撃についても仲間関係の特徴が明らかにされつつあり、反応的攻撃と同様に、仲間から拒否されている度合いが大きいことが指摘され（Crick & Grotpeter, 1995; Crick, Casas, & Mosher, 1997）、その拒否される度合いは、女兒の方が大きいという報告もある（Crick, 1996）。しかし、Grotpeter & Crick (1996) は、関係性攻撃児は、友だちとの親密度ならびに友だちからの自己開示度が高いことを明らかにし、これは反応的攻撃児が友だちとの親密度ならびに友だちへの自己開示度が低いこととは対照的であることを指摘している。これらの知見をみると、関係性攻撃児は大多数の級友との良好な関係を持つとは言い難く、友だちの数も少ないことが示唆されるが（Crick & Grotpeter, 1995）、少数の親密度の高い友人をもっていることが推測される。しかし、友だちから高い自己開示を受ける関係性攻撃児が、反対にその友だちへの自己開示も高いかと言えばそうでもないようである（Grotpeter & Crick, 1996）、ここに関係性攻撃児の友人関係の流動性が示唆される（Crick, Werner, Casas, O'Brien, Nelson, Grotpeter, &

Markon, 1999)。

また、上述したように、反応的・不表出性攻撃と対人・仲間関係の関連の研究はほとんど見あたらないが、不表出性攻撃児は、仲間に対して敵意を持ちやすい傾向があるにもかかわらず、それを表に出さずに、表面上は良好な対人・仲間関係を保っていることが推測される。これは、ある意味では、アンビバレントな状態とも考えられ、この状態が心身の適応上の問題をもたらすことが十分に予想される。

2. 攻撃性と外在化問題

児童が示す諸々の問題は、外在化問題 (externalizing problem) と内在化問題 (internalizing problem) に大別される。外在化問題とは、問題が外に現れる場合で、行為障害 (Conduct Disorder:CD) や反抗挑戦性障害 (Oppositional-Defiant Disorder:ODD) はその代表例である。他方、内在化問題は、問題が内に現れる場合で、うつや不安がその代表例となる。これらの内、攻撃性は外在化問題に直結する問題をもちやすいとされ、この問題についてこれまでに数多くの研究が行われてきた。

一般に、児童期における高い攻撃性が青年期以降における様々な外在化問題、つまり非行や行為障害につながるということがわかっている (Farrington, 1991; Loeber & Dishion, 1983; Parker & Asher, 1987; Vitaro et al., 1998)。また、児童期においても、反応的攻撃児は他者に暴力をふるう、学校のルールに従えないといった外在化問題に関して、大きな問題を抱えているようである。反応的攻撃児はそうでない児童や関係性攻撃児と比べて、外在化の不適応状態を示し (Crick, 1997)、さらに反応的攻撃の高さは学校からのドロップアウトや問題行動につながることも報告されている (Khartri, Kupersmidt, & Patterson, 2000; Parker & Asher, 1987)。

これに対して、道具的攻撃は、児童期よりも青年期以降の非行につながるものが指摘されている (Vitaro, et al., 1998; Pulkkinen, 1996)、反応的攻撃が後の非行につながらないことは対象的である。さらに、道具的攻撃と破壊的行動傾向との関連も指摘されている

(Vitaro, et al., 1998)。また、関係性攻撃を弁別した研究でも、関係性攻撃と外在化問題の関連性が指摘されている (Crick & Grotpeter, 1995)。そもそも関係性攻撃の特徴自体が、いじめ行動を含有しており、いじめなどの外在化問題との関係は自明とも言える。また、最近の研究では、特に女兒において、ODD や CD と関係性攻撃との関連が指摘される報告も散見される (Prinstein, Boergers, & Vernberg, 2001)。

なお、不表出性攻撃については外在化問題は指摘されず、むしろ次に述べる内在化の問題が顕著となる。

攻撃性と心身の健康

1. 攻撃性と内在化問題

上記のように、攻撃性は外在化問題を多数もたすすが、外在化問題のみにとどまらず、内在化の問題との関連も近年報告されつつある。攻撃性と健康との関連に関する科学的な研究は、もともとタイプ A 性格・行動の研究の流れを継いだ敵意 (不表出攻撃) の研究に端を発している。これらの研究は、特に循環器系の疾患の危険因子としての研究であった。児童においては、敵意と循環器系の疾患や反応との関連を扱った研究はほとんどないが、生活習慣の悪化 (大芦・曾我・大竹・島井・山崎, 2002) やストレス (仙谷, 2002) との関連は指摘されている。

攻撃性の発達の研究では、適応の問題は内在化の問題として扱われることが多く、各攻撃性のタイプと内在化問題の関連が指摘されている。内在化問題の代表例は抑うつであるが、不表出性攻撃と抑うつとの関連の強さが報告されている (仙谷, 2002)。また、関係性攻撃児も、非関係性攻撃児と比較して、孤独や抑うつを報告することが多いことが指摘されている (Crick & Grotpeter, 1995)。さらに、反応的攻撃児は道具的攻撃児に比べ、不幸福感 (unhappiness) といった内在化問題を示すことや (Day, Bream, & Paul, 1992)、抑うつとの関連も報告されている (Vitaro, Brendgen, & Tremblay, 2002)。この問題は、対人・仲間関係の問題や外在化問題の存在と別に考えることはできず、対人・

仲間関係の問題のあり方が外在化問題や内在化の問題への関連を規定している可能性がある。

また、反応的攻撃女児は、反応的攻撃男児よりも抑うつ傾向が高く、同様に、関係性攻撃男児は、関係性攻撃女児よりも孤独感が高いことが指摘されている(Crick, 1997)。反応的攻撃は男児で高く、関係性攻撃は女児で高いことが米国で指摘されているが、このようなステレオタイプの攻撃性と性の関係から逸脱した場合に、内在化の問題が顕著になるデータと解釈できる。

以上のように、小学生の攻撃性は具体的な健康・適応問題、特に抑うつと関連していることは明らかである。攻撃性の中でも表出性攻撃と関係性攻撃については、これらの攻撃性の高い児童が仲間から拒否される傾向が強いことから(Crick & Grotpeter, 1995; Dodge, et al., 1997)、結果として、孤立感が高まり、抑うつが高くなるという道筋が推測されるが、実際に抑うつと攻撃性との関連を攻撃性を3タイプに細分化して調べた研究では、他の攻撃性の影響を排除した場合、表出性攻撃や関係性攻撃ではなく、不表出性攻撃の高さのみが抑うつにつながっていた(坂井・山崎, 2003)。

不表出性攻撃については、仲間関係の特徴は明らかにはされていないが、仲間に敵意を感じながらそれを表面には出さずに良好な仲間関係を保とうとするアンビバレントなストレス状況が抑うつをもたらすことが予想され、その結果、他の2つの攻撃性と比較して、抑うつへの因果関係が強くなっていることが考えられる。

また、高攻撃性児童の中には、抑うつを示さないまでも、学校生活への全般的適応が、上記の原因で悪くなる徴候を示す者がいることが予想され、特にその徴候の初期のものは学校生活を楽しめなくなる傾向、つまり、学校生活享受感情の低下などに敏感に現れることが考えられる。児童の心理的な不適応の初期状態を敏感にとらえるためには、抑うつのみではなく、普段の学校生活の享受感をとらえることが必要であろう。このような傾向に関しても不表出性攻撃の高さが他の2つの攻撃性に比較して強い影響力をもつ可能性が指

摘され、さらに男児に限ってではあるが、関係性攻撃の高さも学校生活享受感情の低下に影響していた(坂井・山崎, 2003)。自分の性別にふさわしくない攻撃行動は児童の健康・適応状態を低めることが指摘されているが(Crick, 1997)、男児の関係性攻撃と学校生活享受感情の因果関係が性別規範によるものであると結論づけるためには、児童が関係性攻撃は女児に特有の攻撃性であり、男児の関係性攻撃行動は性別規範より逸脱していると見なしているかどうかを確かめる必要がある。

引用文献

- Asher, S. R., & Hymel, S. 1981 Children's social competence in peer relations: Sociometric and behavioral assessment. In J.D. Wine & M.D. Syme (Eds.), *Social competence* (pp.125-157). New York: Guilford.
- Asher, S.R., & Parker, J.G. 1989 The significance of peer relationship problems in childhood. In B.H. Schneider, G. Attili, J. Nadel, & R.P. Weissberg (Eds.), *Social competence in developmental perspective* (pp.5-23). Amsterdam: Kluwer Academic Publishing.
- Bierman, K.L., Smoot, D.L., & Aumiller, K. 1993 Characteristics of aggressive-rejected, aggressive (nonrejected), and rejected (nonaggressive) boys. *Child Development*, 64, 139-151.
- Cairns, R. B., Cairns, B. D., Neckerman, H. J., Gest, S. D., & Garipey, J.-L. 1988 Social networks and aggressive behavior: Peer support or peer rejection? *Developmental Psychology*, 24, 815-823.
- Coie, J.D., Dodge, K.A., & Copottelli, H. 1982 Dimensions and types of social status in the school: A cross-age comparison. *Child Development*, 18, 557-571.
- Coie, J.D., & Kupersmidt, J.B. 1983 A behavioral analysis of emerging social status in boy's groups. *Child Development*, 54, 1400-1416.
- Crick, N.R. 1996 The role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in the prediction of children's future social adjustment. *Child Development*, 67, 2317-2327.
- Crick, N.R. 1997 Engagement in gender normative versus

- nonnormative forms of aggression. *Developmental Psychology*, 63, 1305-1320.
- Crick, N.R., Casas, J.F., & Mosher, M. 1997 Relational and overt aggression in preschool. *Developmental Psychology*, 33, 579-588.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1996 Social information-processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child Development*, 67, 401-413.
- Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 67, 993-1002.
- Crick, N.R., Werner, N.E., Casas, J.F., O'Braian, K.M., Nelson, D.A., Grotpeter, J.K., & Markon, K. 1999 Childhood aggression and gender: A new look at an old problem. In D. Bernstain (Ed.) , *The Nebraska symposium on motivation* (Vol. 45) (pp.75-141) . Lincoln: University of Nebraska Press.
- Day, D.M., Bream, L.A., & Paul, A. 1992 Proactive and reactive aggression: An analysis of subtypes based on teacher perceptions. *Journal of Clinical Child Psychology*, 21, 210-217.
- Dodge, K.A. 1983 Behavioral antecedents of peer social status. *Child Development*, 54, 1386-1399.
- Dodge, K.A., & Coie, J.D. 1987 Social-information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 710-722.
- Dodge, K.A., Coie, J.D., Pettit, G.S., & Price, J.M. 1990 Peer status and aggression in boys' groups: Developmental and contextual analyses. *Child Development*, 61, 1289-1309.
- Dodge, K. A., Lochman, J. E., Harnish, J. D., Bates, J. E., & Pettit, G. S. 1997 Reactive and proactive aggression in school children and psychiatrically impaired chronically assaultive youth. *Journal of Abnormal Psychology*, 106, 37-51.
- Farrington, D. P. 1991 Childhood aggression and adult violence: Early precursors and life outcomes. In D. J. Pepler & K. H. Rubin (Eds.) , *The development and treatment of childhood aggression* (pp. 5-29) . Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Grotpeter, J.K., & Crick, N.R. 1996 Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, 67, 2328-2338.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationships and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. J. Whitehurst (Ed.) , *Annals of child development* (Vol. 2, pp. 251-297) . Greenwich, CT: JAI Press.
- Khartri, P., Kupersmidt, J. B., & Patterson, C. 2000 Aggression and peer victimization as predictors of self-reported behavioral and emotional adjustment. *Aggressive Behavior*, 26, 345-358.
- Loeber, R., & Dishion, T. J. 1983 Early predictors of male delinquency: A review. *Psychological Bulletin*, 94, 68-98.
- 前田健一 1999 児童期の社会的地位タイプと行動特徴に関する発達の研究 愛媛大学教育学部紀要第(特)部教育科学, 46, 25-35.
- 大芦 治・曾我祥子・大竹恵子・島井哲志・山崎勝之 2002 児童の生活習慣と敵意・攻撃性との関係について 学校保健研究, 44, 166-180.
- Parker, J.G., & Asher, S.R. 1987 Peer relations and later personal adjustment: Are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*, 102, 357-389.
- Poulin, F., & Boivin, M. 2000 The role of proactive and reactive aggression in the formation and development of boy's friendship. *Developmental Psychology*, 36, 233-240.
- Prinstein, M. J., Boergers, J., & Vernberg, E. M. 2001 Overt and relational aggression in adolescents: Social-psychological adjustment of aggressors and victims. *Journal of Clinical Child Psychology*, 30, 479-491.
- Pulkkinen, L. 1996 Proactive and reactive aggression in early adolescence as precursors to anti- and prosocial behavior in young adults. *Aggressive Behavior*, 22, 241-257.
- Putallaz, M. 1987 Maternal behavior and children's sociometric status. *Child Development*, 58, 324-340.
- Rubin, K. H., Bukowski, W., & Parker, J. G. 1998 Peer interactios, relationships, and groups. In W. Damon (Ed) , *Handbook of child psychology. 5th ed., Vol. 3. Social, emotional, and personality development* (pp.619-700) . New York: Wiley.
- 坂井明子・山崎勝之 2003 小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響 学校保健研究, 45, 65-75.
- 坂井明子・山崎勝之 2004 攻撃性概念の細分化と形成過程 美作大学・美作大学短期大学部紀要 49, 1-7.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1988 仲間関係に問題をもつ子ども－仲間アセスメントによる分析－ 宮崎大学教育学部紀要教育科学, 63, 17-23.
- 仙谷真弓 2002 攻撃性の表出と子どもの心身の健康 山崎

勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学—発達・教育編—
(pp.168-181) ナカニシヤ出版

- Singleton, L. C., & Asher, S. R. 1977 Peer preferences and social interaction among third-grade children in an integrated school district. *Journal of Educational Psychology*, 69, 330-336.
- Vitaro, F., Brendgen, M., & Tremblay, R.E. 2002 Reactively and proactively aggressive children: antecedent and subsequent characteristics. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 43, 495-505.
- Vitaro, F., Gendreau, P.L., Tremblay, R.E., & Oligny, P. 1998 Reactive and proactive aggression differentially predict later conduct problems. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 377-385.
- Willis, L. M., & Foster, S. L. 1990 Differences in children's peer sociometric and attribution ratings due to context and types of aggressive behavior. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 18, 199-215.

(2004年12月1日 受理)